

第1回かわさき教育プラン学校教育専門部会会議録

日 時	平成15年7月24日 (木)	18時15分 開会 20時55分 閉会	
場 所	川崎市中心企業・婦人会館 大会議室		
出 席 者	児島 邦宏 委員 (東京学芸大学教授) 天笠 茂 委員 (千葉大学教授) 西野 博之 委員 (フリースタタまりば代表) 片山 世紀雄委員 (総合教育センター 家庭訪問相談員) 増田 和子 委員 (市民代表) 内田 省治 委員 (PTA推薦) 沢木 光雄 委員 (平間中学校長) 本間 俊 委員 (東柿生小学校教諭) 村上 寛 委員 (総合教育センター 教科教育研究室長) 中島 慎一 委員 (指導課主幹)		欠 席 なし 企画課長 (市川) 傍聴者 2名

- 1 開 会 司会が開会を宣言する。
- 司会から本日の資料の確認
- 2 資料説明 事務局（川崎）より本日の協議題3点について説明があり、本日の話し合いの方向性を示した。
- 3 委員の交替 　　P T A 連絡協議会の役員改選に伴う委員の交替について紹介があった。
について 　　（新委員 内田委員）
- （これより議長は児島部会長）
- 4 協議題1 　　昨年から学校週5日制がはじまった。ゆとり教育としてはじまっているのだが、現実にはゆとりがなくなっているのではないか。家庭に帰すことも大切な視点であるが、学校でやる内容があまり変わっていないのに時間はなくなっている。夢がそがれているのではないか。
- 西野委員 　　たしかにゆとりはなくなっている。子どもの忙しさも変わってはいない。文部科学省から出てくる資料をみると競争が激化するような印象がある。世界に通じるトップレベルの子どもを育てるという方向性もうち出されており、たくさん子どもたちがおきざりにされていくようなことも感じる。現場ではどうか。
- 沢木委員 　　教員の立場では、大変忙しくなった。今まで土曜日の午後にやっていたことができなくなったので、平日はぎっしり詰まっている状態である。物事が消化しきれないままにどんどん先に進んでいる状況である。絶対評価を取り上げてみても、教員同士が十分に情報交換をできないでいる。中学校では、評定の結果が高校入試に直結する部分があるので、説明責任などにエネルギーを費やしている状況である。
- 増田委員 　　先生方は忙しいかもしれないが、小学校の低学年の子どもをみているとのんびりしており、特に土・日はゆっくり過ごしている印象がある。
- 沢木委員 　　もともとゆとり教育は、子どものためだからいいのではないか。
- 増田委員 　　先生方が忙しいから保護者がコンタクトをとるのが大変難しい。
- 本間委員 　　総合的な学習の時間が導入され、学校週5日制もはじまって6時間授業の日が今までは週に1回だったのが3回に増えている。高学年担当と低学年担当とでは、教員の事務量が違う。今開かれた学校をめざしているが安全面の準備等多方面の要求がある。

- 内田委員 色いろなことを各学校ごとにやっている。工夫をしていることがとても良いと思う。
- 本間委員 今までは画一的な活動が多かったが、現在は地域の方が学校に入ることもあり、それが良い面にててくれば理想的である。今は過渡期ではないか。
- 西野委員 夢はなかなか出てこない。大人も子どもも明るい夢が持ちにくく、現実的である。
「私なんか別に・・・」と自尊心が傷ついている。学校教育では、なによりもまず生きることの大切さを伝え、育んでほしい。高学年になるにしたがって、自分はダメだという意識が強くなると感じている。自分は必要とされているということを知りたくて川崎から発信したい。
- 片山委員 ストレートな夢でなくていいと思う。自尊心が問題になっている印象はある。子どもの発達段階に応じた指導は大切であると思う。小学校では楽しくスタートするが、3・4年生から不登校が増え始め中学校ではグンと増える。その裏側にはどんなことがあるのかが問題である。9才の壁（抽象的な思考レベルが育つ時期）をうまく乗り切ることが大切でそれが不登校につながることもある。就学時の健康相談で障害のある子どもが普通学級に入りたいという希望があり、その結果不登校になる事例もある。通常学級でも子どもが自分らしさを発揮できるような一人ひとりの子に応じた支援のある教育が大切である。担任は一日に一人の子どもに1回から2回は最低言葉かけをするようなことがあればいいのではないかと思う。障害のある子どもはアピールするから周囲がほっておかず、不登校は非社会的なケースが多いので手が届かずあともまわしではいけないのではないか。
- 部会長 この協議題の内容を読むと、心の教育の部分が書かれていない。生命の教育・自尊心・ともに生きることを通して夢につながる子どもの生活があるのではないか。
特色ある学校づくりの推進を夢のある学校づくりとして、学校が夢につながるような教育をしてほしいと思う。
- 増田委員 先生方が忙しくて夢を持ってない状況だと心配である。先生の指導は子どもに大きな影響を及ぼすので、先生方にはぜひ余裕をもって夢を持って子どものそばにいてほしいと思う。そんな方法はないのか。
- 村上委員 センターでは、教員の研修を担当している。時代の要請に応じて研修の内容も変わってくるので、今は過渡期かもしれないと感じている。現在は先生一人でというよりも学校全体でという取り組みが多くなっているようだ。
ある小学校で、子どもが主役の学校づくりの一端を見せてもらった。学校は与えられた勉強だけではなく、生き方や生きていくための勉強であることを気づかせていくことが大切である。子どもの姿をみて教師も元気をもらうこともある。川崎の教育のためにいろいろな人の声を集めることも必要ではないか。

西野委員

昨日オープンした「かわさき子ども夢パーク」では、「家をつくる」「火をたく」「いかだをつくる」など体験活動を大事にしている。

『心のノート』を使ったから心が育つのではなく、子どもたちが工夫しながら遊ぶ、つくって楽しむということを実感することが大切である。

子どもはいつでも失敗をくり返しながら育っていく。

子どもが活動するときに、どこまでが本人の責任、どこからが親や学校の責任なのか自分で責任をとれるということも大事なこと。あまり責任を迫ると、ついつい先生も守りに入ってしまい、子どもの生き生きとしたチャレンジに待ったをかけてしまう。責任に関することについてもゆるやかな関係づくりができないだろうか。

部会長

教師の勤務の在り方は協議第3で話し合います。
もう少し、学校・地域・家庭をめぐることについてご意見をお願いします。

中島委員

教師はみんな一生懸命やっており、どうしていいかわからなくなってしまっているの、具体的に教えてほしい。夢を持つためにはきっかけが必要で、夢を持つことによって活力が出てくる。一つの材料を夢のあるビジョンにしていくべきで、例えば今年度から教育委員会指導課では、特色ある学校づくりの事業としてチャレンジ事業を行っている。子どもが本物との出会いを通して夢が生まれ、そして夢の持ち方もいっしょに考えていくような教育が実践されようとしている。

天笠委員

(1)～(12)の施策をやると本当に夢が育まれるのだろうか。「夢」とそれぞれの施策がどう結びついていくのか。ビジョンとか未来とかということばがもっとでてきてもいい。子どもたちの将来の展望を豊かにしていくことと夢は関わっていると思うが、自分を豊かにしていくような取組とこの施策はどのようにつながっているのか。

特色ある学校づくりにしても、地域の人自分たちの学校をつくっていく気運を興していくことが大切ではないか。これは21世紀における大切なことである。地域の人たちが先生方とやっていこうとする施策を提示していくことが大切である。また、教育課程もしっかりしたものにしていかなければならない。基礎基本をしっかり押さえて、各学校で教育課程をしっかり編成して実施していくことも柱の一つとして盛り込んでいく必要がある。

部会長

協議題を読んでも基本的な方向性がなく施策のみである。学校が地域をつくる、地域が学校をつくることをもう一度考えるべき。

幼・小・中・高の成長過程でどういう姿で大人になっていくのか全体的な姿が見えない。売りになるものを考えてほしい。

片山委員

学校教育の原点は、子どもが生き生きと活動する姿である。方法論が羅列されている。内容と方法はわけないといけない。大元のところをしっかりとしてほしい。

部会長	この問題について全体で論じるのか。
事務局	この段階でビジョンの提示はしていない。ビジョンをもっていないと子どもの夢につながらない。(1)～(12)は今の川崎の現実である。そこから夢を育むためにはどうしたらいいかを議論していただきたい。
沢木委員	<p>学校教育だけでは夢は育たない。我が校での実践を紹介する。</p> <p>子どもたちが大好きな平間中・保護者から信頼される平間中・地域から愛される平間中等々の目標を掲げている。私は主体性や自主性はだまっけても育つものではないと思っている。それには指導が大切であると考えている。学校の近くの公園に落書きがあってそれを書いたのは、うちの学校の生徒であるということがわかった。生徒も地域からいろいろ非難されることが多くて自信を失っている状況があった。そこで、落書き修復作業をしようと7月上旬に職員に呼びかけた。その際半数教師は下を向いてしまった。生徒会にも働きかけたら約3分の2の生徒がボランティアとして修復作業に参加した。保護者や地域の方も30人ぐらい参加してくれた。そんな活動を通して生徒は地域の一人としてやれるんだという自信を持ってくれたと思う。開かれた学校というが、学校だけではできないと思う。学校が説明責任を果たしながら学校を開いていくことで時間が経つと風向きが変わってくると思う。</p>
部会長	子育て支援は、学校だけでなく、地域・子ども・保護者が一体となって進めるべき。体験活動や教育課程の編成も大切である。
天笠委員	それぞれの学校がランドデザインをもつような施策、どういう方向に歩もうとするのか、どういう全体像を描いていくのか、それぞれの学校としてのビジョンすなわちランドデザイン、そのレベルのノウハウの開発＝施策が必要で、めざすものを見定めながらやっていくことが大切である。
片山委員	それぞれの学校がランドデザインをもつことについてだが、各学校それぞれ学校教育目標をたてているが、それを具現化するところでギクシャクしている。
部会長	学校教育目標のような大きなビジョンを図式化したものがランドデザインである。
片山委員	各学校のレベルではやっているが、それぞれに温度差があるのではないかと。
西野委員	<p>課題整理表、No3不登校の原因について、データはどのようにして抽出されたものか。</p> <p>課題整理表 教育ボランティアについて1回500円と書かれているが今後どう考えていくのか。見直すべきではないか。</p> <p>学校に出入りするボランティアによって子どもが傷つけられたというケースもある</p>

と聞いている。どのような形でどのような人を採用するのか、むずかしい。安易な形を取らずにボランティアの位置づけについて再考していく必要があるのではないか。

部会長 内容を詳しく教えてほしい。課題整理表には現状とお金のことばかり書いてあるがどうだろうか。

事務局 不登校については、30日以上欠席の児童生徒のことだと思うが、役所に帰って調査しあらためてお答えしたい。教育ボランティアについては、平成11年度が第1回のスタートであった。ボランティアについてもいろいろ種類があるので後日提示していきたい。

部会長 協議題イについて議論を進めたい。

天笠委員 行政部会の論点に「2学期制」と「学校評価」があるが、これらについては、とりわけ「学校評価」はこちらでも検討すべきではないか。学校評価の在り方、改善についてはもう一度見つめ直してやる必要がある。それが学校運営のあり方にも通じる。

片山委員 学校評価には、内部評価と外部評価がある。内部評価にウェイトをおいてしっかり取り組むべきである。外部から聞かれたときに一生懸命やっていますだけでは通用しない。内部評価も川崎市内で何校かやっているがまだまだ広まっていない。開かれた学校づくりのためには外部評価も必要である。

増田委員 開かれた学校づくりの一つとして学校教育推進会議とか子どもの参加があがっているが、この学校教育推進会議というのは教育行政部会の議題としても学校運営の市民参加というところであげられている。行政区単位の教育委員会の可能性とも関わってくるのかと思う。教育行政部会のNo.3とNo.10でも議論されているようなので、連携をとりながら議論を進めていく必要がある。

内田委員 学校教育推進会議は、かかわっている人間にとっては大変わかりやすい。しかし、学校がこうやっていくということを外部に発信していないのでわからないから評価ができない。だから地域の人には呼ばれても昔はこうだったといった話しかできない。学校教育推進会議は、大変いい会議だから学校のスローガンがはっきりみえるようにしてほしい。

学校説明会が開かれたので参加した。以前とは様子も変わってきてオープンになった。説明会を開いてくれたら親も責任を持って聞くことが大切である。参加者が少ないので現実でもっと保護者の意識を高めていかなければならない。

部会長 意識を高めていくのは時間がかかる。それは主体的な責任を持つということである。

内田委員	P T A会長をしていたとき委員さんとの懇談のようなことをして生の声を聞くやりとりができた。このような取組の積み重ねが必要。
西野委員	そのような会議は、教師の勤務時間内に行われるのでなかなかでられない。開かれた会議をするためにはもっと時間を変えるべき。
内田委員	先生方が学年単位で土日にでてもらってもいいし、融通のきく運営をしてほしい。そうすれば父親の参加が増える。
天笠委員	次の時代を担うスクールリーダーのあり方、管理職をいかにして育てていくかの議論が必要である。
増田委員	学校運営・施設整備の中で、学校の安全対策のあり方について考える必要はないだろうか。これからの学校は開かれた学校になると思われるが、開かれた学校と安全の両立は難しい面がある。今まで閉じた世界であった学校が開かれるわけだから開かれた学校を前提にした学校の安全対策について考える必要があるのではないか。
内田委員	わくわくプラザについてもいろいろ問題があるようだが。
事務局 (市川課長)	わくわくプラザについては、子どもがだれでもこられるということを前提とした施策である。運営上は市民局が行っているので、学校の管理者とわくわくプラザの管理者とのコミュニケーションをどうしていくのかとか、社会教育部会でも議論されている。 いずれにしても両方の部会にまたがるようなことは策定委員会で整理していきたい。
部会長	学社連携ということからもわくわくプラザについてもすりあわせをお願いしたい。
中島委員	わくわくプラザについては市民局と教育委員会との話し合いが進んでいる。安全についても今後ビジョンをだせたらと考えている。
部会長	福祉施設と社会教育とが安全について提案するなどマルチ的な運営が望まれるのではないか。 それでは協議テーマについてお願いしたい。
村上委員	センターでは、教員の資質向上について研修を中心に進めている。天笠委員から教育課程を各学校でというご意見があったが、同じようなことが研修でもいえると思う。 学校のビジョンに合わせて教員が研修に参加する。必要に応じて出前研修も必要で、全市の動きの中での研修の在り方を今後検討していきたい。

部会長	ビジョンはあるけどカリキュラムが作れないという場合は、コーディネーターが必要である。現実とビジョンをつなぐこと、現場に出向いて具体的な研修をしていかなければならない。
片山委員	ある小学校では、40名の職員のうち、半分が40代・50代の職員で、平均年齢は46才である。当然女性が多く学校運営に大変苦慮していることがある。それは管理職の指導力以前の問題で、そのまま学校運営をしていくと若い先生に負担がいくことになる。職員構成を考えると、若手を養成することが必要となってきている。高齢になって意欲が落ちた人は適材適所へ配置換えをすとか、学校運営、学校評価とも絡んで考えていかなければならない。
部会長	校内研修の充実と共同体づくりについてはどうでしょうか。
本間委員	うちの学校では、コンピュータの研修に参加する教員が増えている。考えてみるとコンピュータはあくまでも手段であって目的ではないと思う。子どもたちはゲームはやるけれど知的なものへの興味には繋がってこない。子どもにまかせていればよい、子どもが動いていればよい、発信していればよい、といった方向に走っていないかを見直したい。我々が新任教員の時は、指導案が決まっていたが最近は許容範囲が広がった。若い人の指導案の書き方などをみても内容的な部分で疑問をもっているし今後のことについても危惧している。1時間のものがしっかり書けなければ年間の見通しがたたないのは当然である。ポイントをしばって一斉指導も大切であるし、教えることも大切である。指導力ということで今後このようなことが影響してこなければいいなと思っている。
天笠委員	組織やマネージメントにかかわることについても若いときから研修することが必要である。そうしないと職場の中で、1+1=2以上になっていかない。リーダーシップのノウハウ、フォローアップなど、組織やマネージメントにかかわることについての研修は中堅クラス以上の研修であったが初任研から必要である。そういう研修プログラムを考えてもいいのではないか。
西野委員	神奈川県では、24才までの若者が2日に一人は自殺していくという現実がある。小・中学校の教育で何を大切にしていくのか。どこに焦点をあてるのか。 「フリースペースたまりば」の例では、不登校の子どもの担任が出席報告書を書くときになってはじめて連絡してくるというようなことがしばしばある。「フリースペースたまりば」に子どもの様子を見に来たこともない教員がほとんどである。不登校に対する教員の意識もあまり進んでいないように思う。研修をどのように進めていくのか。このような現実も考えてほしい。
部会長	ライフステージの中でひろがる教育問題、若い先生にどういう力をつけさせるのか、研修プログラムの見直しが必要となってきた。

増田委員

学校の先生は女の先生が多いと言う話がありましたが、今の時代は、男の人も女の人も同じように働くといわれ、教職というのは、子どもを育てながら働く普通の職場ではないかと思う。先生の専門性の育成を考える上で、今は男女共同参画の時代で、これから10年先の教育を考える際、この視点を落としてはいけないと思う。女性が子どもを産み、育てながら働くことはあたりまえになる。学期途中でクラスを受け持ち指導にあたる先生に求められている技術は、非常に高いと思われる。しかし、こうしたケースで指導力の高い教員が当てられることは少ないようだ。制度として、教員配置の仕方に課題があるのではないか。年度途中にいかなる状態のクラスをあてられたとしても学級運営をこなすことができる高い指導力をもつ教員を養成すること、このような教員を的確に配置していくということが必要ではないか。スーパーティーチャーのような人が求められていると思う。

中島委員

全くその通りである。今指導主事が委員会の中にいるが、そういう人材活用の工夫の仕方、運用の仕方も視野に入れていくべきである。

部会長

協議題2 アンケートについて

事務局

事務局（川崎）よりアンケート項目について説明

天笠委員

このアンケート項目は学校に対するイメージを聞こうとしているのか。それならば、学校の存在、どんな意識、学校が開かれているか、イメージづくりなどそんなレベルでアンケート項目をつくるのがいいと思う。

西野委員

これは市民向けか。

内田委員

(1)(5)(7)はわかるがそれ以外は自分の子どもが学校に行っていないからわからない。対象が市民ならばもう少し項目を考えたらどうか。

沢木委員

この内容では、私は自分の勤務している学校ならわかるが住んでいる地域の学校については答えられない。

事務局
(田中)

このアンケートは無作為に選んだ方に対して行うもので、年齢は5才刻み、職業、勤務先、家族構成、子どもがいるかはわからない。

天笠委員

「明るい」とか「暗い」とかのイメージを両方において段階的にやる方法と、学校が「開かれている」と「閉鎖的」など尺度的にみる方法がある。同じアンケートを何年間かとして推移をみることも必要。学校のイメージを市民の人たちがどのように抱いているかを知るうえで参考になるようなアンケートにすべきではないか。

西野委員

このアンケートの目的と知りたいことは何か。

事務局

学校教育へのイメージを時間の経過でみていきたいと考えているが、一回で終わりになってしまう。調査の時期は11月から12月、調査結果は年明けにはでる。

片山委員

イメージ論へ変えていき、それを総合的に調整することが必要。

事務局
(市川課長)

社会教育部会でもアンケートについて話し合った。次回もう一度大まかな視点でアンケートの方向性について提示し、別途意見をいただくのはいかがか。

部会長

現実の姿、イメージをよく考え、保護者と子ども、保護者と学校、地域の協力についても内容に盛り込んでほしい。地域の方は学校に何を期待しているのかなどもアンケートに盛り込んでほしい。

事務局

今回の議事記録は整理して策定委員会へ

今後の日程 第2回策定委員会 8月18日(月)エポック中原
この部会からのメンバーは、児島部会長、増田委員
学校教育専門部会は10月を予定

9 閉会